

## 2007年度人文学フィールドワーカー養成プログラムによる 名古屋大学／ロンドン大学合同ワークショップ「日本宗教のフィールドワーク」 実施報告書

阿部 泰 郎

比較人文学

日本の宗教をめぐるのは、過去の宗教者の遺した所説から民俗社会に息づく営みまで、その歴史的な達成から現在の動態に至る全てを見渡す膨大な研究の蓄積があり可能性を秘めている。これを日本の大学において専門の日本研究として学ぶ大学院生と、海外の大学における“日本研究”として、いわば外部からのまなざしにおいて学ぶ大学院生と、双方の探究を会わせることで、互いがどのように照らし出され、いかなる問いが生ずるのか、こうした意図を籠めて、今回のワークショップは企てられた。

その発端は、2005年6月に、ルチア・ドルチェ教授が企画され、ロンドン大学 SOAS 日本宗教研究センターが主催した国際シンポジウム「日本神話の基底」に阿部が招かれて報告をつとめたことに始まる。ここでは日本の中世神話である第六天魔王と天照大神の契約神話について論じた。翌年ドルチェ教授が名古屋を訪問し、阿部が中心となって調査研究を行っている真福寺大須文庫を参観され、この機会に教授が特に関心を抱かれる中世密教の秘事口伝テキストについて、あらたな発見が相次いでいることに深く興味を持たれたことが更なる契機となった。また、かつてドルチェ教授の許で日本のシャーマニズムについて研究し修士課程を了え、更に名古屋大学大学院比較人文学研究室に進学して御嶽講の研究に取り組んでいる小林奈央子君が両者を結び付けた。こうした機会と縁とが整って、SOAS の大学院生と文学研究科の大学院生が互いに自らの研究を提示し、議論を交すことができばというアイデアが自ずと生れたのである。ドルチェ教授もこの提案に賛同され、日本宗教研究センターのプログラムとして立ち上げていただいた。名大文学研究科大学院 GP 教育推進室にも、院生の派遣と旅費の支給という形でこの計画を支援していただいたお陰で、2008年3月に SOAS において合同ワークショップが開催される運びとなった。名大側では、折しもフルブライト留学生として比較人文学研究室で中世文学の研究を行っていたスタンフォード大学のコナン・ケアリ氏の参加を得ることができ、外の参加者へ

のサポートをお願いできたのは心強い援軍であった。

かくして、名大から参加する発表者は、木曾御嶽行者の「霊神」信仰と「御座立て」儀礼を通して行者の実践するコスモロジー形成機構の分析を試みる小林君、真福寺に伝来する宗教テキストの中の歴史叙述テキストの分析を通して中世仏教の歴史像の変遷を検討する三好俊徳君（同君はグローバル COE プログラムの大学院生派遣プログラムに応募し採用されての参加である）、中世日本の宗教伝承の一主題としての冥途蘇生譚を記憶術として解釈しつつ『平家物語』の役割を照射しようとするケアリ氏、という陣容である。加えて、阿部は近年集中的に追究している中世真言僧文観の著作に関する最新の研究成果を提示すべく、特別セミナーを企画した。文観は、ドルチェ教授が目下の研究主題とされている中世密教の「三尊合行法」をめぐる図像－儀礼テキストに最も深く関与した僧侶であり、その著作はこの法の成立と密接に関わるからである。日程は、丁度、日本密教の思想と象徴性について比較文化論の立場から新鮮な研究を展開されている彌永信美氏が SOAS の招きにより特別講座を行われている期間の終りにあたり、その連続講座の最後のプログラムとして本セミナーを位置付け、氏にもコメントーターとして参加していただくことができた。SOAS 側からは、ドルチェ教授の許で日本宗教を研究する四名の院生が報告を行った。各報告の扱う対象や視点は実に多彩であるが、全体として日本宗教の多様な位相を、その展開する場と、所産としての思想・歴史叙述・行動について、方法論を絶えず意識しつつ考察しようとするものであった。と同時に、その立脚するところは、文献研究も採訪した一次資料にもとづき、また実地踏査やインタビューによって立証しようとする、悉くフィールドワークを介した実践的研究であった。

\*

このワークショップに臨んだ筆者の旅程は次の通りである。院生一行に先立ち、3月15日にパリへ赴いた。総長裁量経費（UC21 国際学術交流プロジェクト）

により、国際言語文化研究科の伊藤信博助教が国立図書館（リシュリユー館）において遂行している館蔵日本古典籍の調査を支援するためである。16日に同館東洋文献室を訪問し、目録および仏教書を閲覧した。同日中にユーロスターでロンドンに移動し、宿舎としたラッセルスクエアのホテルで一行と合流、ドルチェ教授・彌永氏と共に打合せを行った。

17日に始まったワークショップについては、ケアリ・小林両君の報告に詳しいので、ここでは重複を避けて省略にしたがう。開催前の午前中に、本プログラムの一環として、ドルチェ教授の格別の配慮により大英図書館貴重書室での特別閲覧が設定されており、日本の宗教書（古写経と古版刊経）と奈良絵本・絵巻を拝見することができた。特に熟覧が叶ったのは『大職冠』絵巻であったが、この絵巻は2007年8月に西尾市岩瀬文庫で行われた国際奈良絵本会議において恋田知子氏が紹介された新出の慈受院本絵巻に近似した作風であり、舞曲『大職冠』は筆者の中世研究の出発点となった作品でもあったので、ここでテキストを前にそれらについて最新の知見をレクチャーできたのは光栄なことであった。同館の展示室でも、リンディスファーンの福音書をはじめ東西の聖典の見事な装飾写本が展観できた。

18日午前中の特別セミナーに臨んでは、今回のペーパーに加えて関連文献の解題・資料紹介・文献年表等をもって編集した小冊子『文観著作聖教の研究』（90頁）を制作し、参加者に配布した（ペーパーの英訳はケアリ君の助成により同時に配布）。報告は「文観著作聖教の再発見」と題し、西大寺叡尊門下の律僧ながら醍醐天皇に重用され、東寺長者、醍醐寺座主に任ぜられて真言教界の頂点に立った文観弘真（1278-1357）に関する文献学的研究である。彼の存在は、後世に「邪流」として異端視され「異類異形」のイメージのみが流布し、かえってその著作は殆ど学問的な検討の対象にされていなかった。真福寺聖教中に含まれる彼の著作に注目し、これを紹介した（真福寺善本叢刊第二期第三巻『中世先徳著作集』）のを契機として、仁和寺や高野山大学図書館などに伝来する他の著作類が明らかになり、それらについて暫定的なレポートを行ったのである。その成果の中でも、特に三尊合形法とその本尊図像を含む注釈テキストである『御遺告大事』が文観の著作であることを確定したことは重要な発見であり、ここに初めて文観の思想とそのテキストについて本格的な解釈に取り組む基盤が提供されたといえよう。この報告をめぐって、ドルチェ教授と彌永

氏からそれぞれ懇切かつ有益なコメントがあり、意見交換を経て更にこの問題の射程は深められた。午後は大英博物館を見学し、また周辺のブルームズベリー・グループの活動舞台となった街を散策した。

19日は朝、ロンドンからオックスフォードへ移動し、ポドリアン図書館を目指した。その日本館には、既に小林君が宗教書等の閲覧を申請しており、本館で登録手続の後、日本館へ向かい、司書を勤めるイズミ・タイトラー氏の配慮に満ちた懇切な説明を受けつつ、所蔵の宗教テキスト（中でもマックス・ミュラーに師事した近代仏教学の先駆者南条文雄の英訳阿弥陀経草稿は興味深い媒介的テキストであった。）と奈良絵本を親しく閲覧することができ、また書庫内の見学を許された。このうち、挿絵のみを画帖に仕立てた作品名未詳の分については、『大仏の御縁起』であることが確認された。

翌20日は、鉄路ウェールズを経て西端のホーリーヘッドに至り、そこからフェリーでアイルランドへ赴いた。アイリッシュ海を渡る船上では、一行と同行した大阪大学の米田真理子氏がチェスター・ビーティ・ライブラリーでの国際奈良絵本学会で報告される予定の『千代野の草子』に関する予備発表を行い、その宗教テキストから物語テキストへと変貌する諸異本間の動態について、充実した討議を交した。夕刻にダブリンに到着し、ホテルにて筑波大学の近本謙介氏と合流した。翌日は一同で古都キルケニーを探訪し、大聖堂や市街の遺跡を巡った。当日は聖金曜日であって、キルケニー城をはじめ公共施設は全て休館、飲食店も酒類を提供せず、ダブリンへ戻っても繁華街は閑散としており、カソリックの信仰の生きている国であることを実感した。

22日には、午前中にトリニティ・カレッジにて「ケルズの書」を拝見するため図書館へ行き、その精緻な小宇宙とロングルームの壮観を驚嘆した後、ダブリン城内にあるチェスター・ビーティ・ライブラリーに向かった。同館は実業家チェスター・ビーティ氏の収集した東西諸分野の絵本・絵巻・装飾写本のコレクションがアイルランドに寄贈されて設立された文庫であり、その中に日本の絵巻・絵本も貴重な写本が多く含まれており、かつて国文学研究資料館がその全容を解題図録を刊行して紹介し、筆者もこれに参画したことがある。今回は、ここで慶應義塾大学の石川透教授の主催による第5回国際奈良絵本学会が開かれ、我々一行もこれに参加するのである。この文庫は、最近ダブリン城に移転し、あらたに市民のための文化施設とし

て開かれた学びの場となった。その点で、前回の学会が開催された「古書ミュージアム」岩瀬文庫とは共通した性格と志向をもっており、今後両者が提携すればどのような可能性が拓かれるであろうかと夢想したことであった。学会では、かつて1978年にこの文庫で国際奈良絵本学会が開催された時の参加者であった國學院大學名誉教授の徳江元正氏の講演をことに感銘深く拝聴し、またポドリアン図書館のタイトラー氏が所蔵奈良絵本の紹介をされる中で、つい先日の訪書の際に確かめられた画帖について言及してくださったのも思い出となることであった。展覧を見学した後、市内のホテルで開催された懇親会に一同で参加した。翌日は午前中に中世アイルランドの聖地であったキャッシュルに赴いた。平原の中にあるロック・キャッシュルの複合宗教遺跡を見学、周辺を散策し、午後には報告を終えた米田氏と近本氏が合流し、一同で一行の旅程を打ち上げる宴をもった。

24日は、朝にダブリンへ戻りヒースロー経由で帰国する院生一行を見送り、米田・近本両氏をロック・キャッシュルへ案内し、そこで別れを告げてバスで南下してコークへ向かい、その空港からヒースローを経て深夜にシャルル・ドゴール空港に着いて、パリで投宿した。翌朝、パリに滞在中であった伊藤氏と東駅にて再び合流し、TGVでストラズブルへ向かった。ストラズブル大学日本文化学科長ジルー村上教授に会い、平成21年度(2009)に名大と合同で開催する予定の国際研究集会について打合せを行うためである。研究室で打合せした後、ジルー氏の案内でコルマールに移動し、会場となるCEJA(アルザス日本文化研究センター)を見学し、所長に表敬のため面会した。CEJAは、ブドウ畑に囲まれた18世紀の修道院を成城学園が改修し寄宿制学校として設立したが、数年前に撤退し、その施設をアルザス地方政府が研究センターとして利用している共同研究機関である。アルザス政府としては、日本との文化学術交流の為にこれを活用したいと考えており、名大のような中核的研究機関に是非積極的な関与を期待したいとの意向であった。この訪問の後、11月には名大とストラズブル大学との間で全学交流協定が締結されるという朗報が飛び込んできた。その実質的な学術交流としても来る6月に予定される研究集会「知の発信と文化創造としての図像生成」は実現が待望される。同日中にパリへ戻り、26日はオランジェリー美術館などを見学した後、午後にはシャトレの天理文化会館にて催された第三回日本文化講演会において伊藤氏と共に講師をつと

め、聖徳太子信仰について講演を行った。翌27日には、午前中にパリ第七大学において、筆者も共同研究者となっている学習院大学の佐野みどり教授の主催される中世掛幅縁起絵研究会によるシンポジウム「中世の信仰と芸術」の基調報告「宗教図像テキスト複合としての聖徳太子絵伝」と題する研究発表を行った。この後、会場を辞して空港へ向かい、名古屋へと帰国した。

\* \* \*

今回の旅行においては、その中心となったロンドン大学でのワークショップの他にも、複数の学会や研究集会および調査に参加することを得、また名大による将来の学術交流を準備するための役割も果たすことができた。こうした複合的な任務を実現できたのは、学内の各種の研究費を組合せて使用することによってであり、とりわけ大学院イニシアティブによる支援が不可欠であった。SOASでのワークショップとセミナーの前後に、各学会のスケジュールに参加し、併せて見学や閲覧を行うことにより、より有機的に相互の成果や知見を結びつけることが可能となり、更なる相乗効果をもたらした。何より、参加した大学院生にとっては充実した全人的な経験となったことであろう。そのうちの一名はグローバルCOEプログラムによる海外調査研究実修プロジェクトに採用されて参加しており、その点でも複合的な資金を支援していただき、かつ有効に利用できたことを各プロジェクトリーダーに感謝申し上げる。この旅のなかで、日本宗教研究ひいては人文学を志す多くの若い研究者同士の出会いと交流が実現したことも、無形の大きな成果であったといえるだろう。

何より、この旅を貫く大きな主題は、テキスト(書物)の探求であった。それは同時に、書物を集め伝える場としての図書館や文庫を訪ねる旅でもあった。そこで尋ねられ、また、議論の対象となったのは、各種の福音書やケルズの書の如き、西欧キリスト教世界の至宝としての聖典であった。それら聖なる文字は図像と深く結合し、文化的にも融合変容した複合テキストとして顕現したすぐれた達成である。大英図書館やポドリアン図書館、そしてトリニティ・カレッジからチェスター・ビーティ・ライブラリーへと、東西諸文明の知の所産の精華としての宗教/物語/図像テキストをめぐって、一同が感動を語り、知見を交わし合う巡礼の旅となった。

更には、この旅において、時にこれらのテキストを直接手にとって新たな発見に導かれるという幸運にも

恵まれた。そうした実地閲覧調査というフィールドワークの成果が、直ちにワークショップや学会など研究の共同体において還元され共有されるということを、大学院生が海外において経験し得たことこそは、最大の成果であったといえよう。その“知の興宴”としての旅は、同時に移動しつつ各都市の街のたたずまいや歴史遺跡の場にたつこと、それぞれの地での交歓を伴う楽しみながらの旅でもあった。街毎のエールや

スタウトの味わいと共に知の蓄積が記憶されることであろう。最後に、このような知の発見への旅を支えていただいた、名古屋大学文学研究科の大学院イニシアティブ GP その他の関係諸機関、また共催として実り多き知の交歓を共にしていただいた、ロンドン大学 SOAS のルチア・ドルチェ教授をはじめとする諸氏と諸機関の司書の方々に、心からの感謝を捧げる。